



確かな学力の向上をめざして【11月】

とっとり学力・学習状況調査 ～調査結果の分析・活用について～

学級担任・学年担当 用

3年目を迎えた「とっとり学力・学習状況調査」（※以下、「とっとり学調」）、今年度の調査結果が各学校に返却されました。この調査が他の学力調査やテスト等と一線を画しているのは、小学校4年生から中学校3年生までの期間、児童生徒一人一人（又は学級・学年・学校全体といった集団）の「**伸び**」の状況を**継続的に把握できる**唯一の調査だということです。平均点や他人との比較ではなく、以前の自分（達）と比べて伸びているかどうかに着目することが大切なポイントです。

とっとり学調では、多種多様で膨大な量の結果データが各学校に返却されています。データは、**誰が・どんな目的で・どれを使うかによって、様々な分析・活用の仕方が考えられます**。今号では、「学級担任・学年担当用」として、日々の学年・学級経営や授業に参画される多くの先生方に向けた分析・活用の例（概要）を紹介します。詳細の方法や必要な基礎知識等については、各学校内でも確認してください。

目的

担当する**学年・学級の一人一人の伸びや状況を把握**して、今後さらに伸ばすための指導や支援に役立てたい！



そんな時にはこれ！

活用データ

- 「帳票40」
- 「個人分析シート」

帳票40 (サンプル)	国語		算数・数学		R4→R5(変化量)											
	R5レベル	昨年度からの学力の伸び	R4レベル	R5レベル	昨年度からの学力の伸び	R4レベル	学習方略						非認知能力			
						主体的・対話的で深い学びの実施	柔軟的方略	プランニング方略	作業方略	人物リソース活用	認知的方略	努力調整方略	自己効力感	勤怠性	自制心	
学校平均	7-B	2	6-A	6-A	3	5-A	0.2	0.2	-0.1	0.1	-	0.0	0.2	0.2	0.0	-
市町村平均	7-B	1	7-C	7-C	3	6-C	0.0	0.1	-0.1	0.0	-	0.1	0.1	0.1	0.0	-
鳥取県平均	7-B	1	7-C	7-C	4	5-A	0.0	0.1	0.0	0.0	-	0.0	0.1	0.1	0.0	-
児童A	7-A	0	7-A	7-C	1	6-A	-0.2	-0.5	-2.0	0.0	-	0.5	1.5	0.1	0.0	-
児童B	6-B	1	6-C	7-C	2	6-B	1.0	1.3	1.5	1.3	-	1.2	1.0	0.2	0.5	-
児童C	8-C	4	6-A	5-A	-1	6-C	1.4	-1.0	0.0	-1.0	-	-0.5	-0.3	0.9	0.6	-
児童D	4-C	-3	5-C	4-A	-2	5-B	0.2	-0.1	0.3	0.0	-	-0.8	0.5	0.6	0.0	-
児童E	9-B	3	6-A	7-A	7	5-B	1.2	0.3	-0.3	0.2	-	0.1	0.0	0.3	-0.1	-

※実際の帳票は、波線部より右側にもデータの続き（各項目の実数値）があります。⇒2面へ

【ワーク】上のデータ（帳票40）から、児童A～E各々の伸びの状況について、どのような傾向が読み取れますか？ 帳票の見方が既に分かる方は、まずは自分で分析してみてください。

分析・活用の手順（例）

分析

- 帳票40には、学年・学級の児童生徒一人一人の「**学力レベル**」、「**学習方略**」、「**非認知能力**」の伸び（変化量）や値（実数値）が一覧で示されています。
- ・まずは、**昨年度からの伸び（変化量）**の状況から、個々の傾向を把握します。
- ・気になる部分や変化量の大きな部分に、特に注目してみてください。
- ・色や印を付けていくと、傾向や気になる部分等をより見える化できます。
- ・「**個人分析シート**」で、個人の伸びの変遷をグラフで把握することもできます。

活用

- 気になる児童生徒の要因分析等をして、支援の仕方を学年等で検討し、効果的な手立てや方策などの取組を模索します。

※分析・活用のための出張校内研修も行っていますので、必要な場合は中部教育局までご連絡ください。



帳票40を活用した分析の例（1面【ワーク】の分析例）

以下に、1面【ワーク】の分析の例をいくつか示しています。これが答えではなく、あくまで帳票の数値を基にするとこのような捉え方ができるのではないかと一例です。

帳票40による実際の分析になると、児童生徒の日々の姿や行動を思い起こしながら数値と照らし合わせて見ることになるので、納得感や違和感、より具体的な解釈や今後の見通し等が自然と出てくるはず。決して明確な“答え”が出てくるわけではありませんが、大切なのは、**先生方が児童生徒の状況や今後の取組・支援等について、共通のデータを基にしながら議論し合い、実践に繋げていくこと**だと言えます。

Bさん：学力レベルの伸びに加えて、学習方略・非認知能力ともに、どの項目も大きな伸びが見られる。この伸びの要因として、どんなことがあったのだろうか？

Aさん：努力調整方略の伸びが大きく、実数値（下表）も高い。プランニング方略が下降している要因が気になる。

	国語		算数・数学		R4→R5(変化量)											
	R5レベル	昨年度からの学力の伸び	R4レベル	昨年度からの学力の伸び	R5レベル	昨年度からの学力の伸び	R4レベル	学習方略					非認知能力			
							主体的・対話的で深い学びの実施	柔軟的方略	プランニング方略	作業方略	人的リソース方略	認知的方略	努力調整方略	自己効力感	勤勉性	自制心
学校平均	7-B	2	6-A	6-A	3	5-A	0.2	0.2	-0.1	0.1	-	0.0	0.2	0.2	0.0	-
市町村平均	7-B	1	7-C	7-C	3	6-C	0.0	0.1	-0.1	0.0	-	0.1	0.1	0.1	0.0	-
鳥取県平均	7-B	1	7-C	7-C	4	5-A	0.0	0.1	0.0	0.0	-	0.0	0.1	0.1	0.0	-
児童A	7-A	0	7-A	7-C	1	6-A	-0.2	-0.5	-2.0	0.0	-	0.5	1.5	0.1	0.0	-
児童B	6-B	1	6-C	7-C	2	6-B	1.0	1.3	1.5	1.3	-	1.2	1.0	0.2	0.5	-
児童C	8-C	4	6-A	5-A	-1	6-C	1.4	-1.0	0.0	-1.0	-	-0.5	-0.3	0.9	0.6	-
児童D	4-C	-3	5-C	4-A	-2	5-B	0.2	-0.1	0.3	0.0	-	-0.8	0.5	0.6	0.0	-
児童E	9-B	3	6-A	7-A	7	5-B	1.2	0.3	-0.3	0.2	-	0.1	0.0	0.3	-0.1	-

※下表は、学力レベル以外の各実数値です。左が今年度の結果、右が前年度の結果です。伸びだけでなく、実数値も併せて確認するとより傾向が見えてきます。

※実数値で1点台の箇所は、課題を示す要チェック項目として見てください。

Dさん：自己効力感や努力調整方略等が大きく伸びているので、前向きに学習に向かう気持ちが大きくなってきたのかもしれない。国語・算数とも学力レベルが下がっているが、認知的方略の下降、柔軟的方略と作業方略の実数値の低さ（下表）に関連があるのだろうか？

主体的・対話的で深い学びの実施	R5結果								R4結果										
	学習方略				非認知能力				学習方略				非認知能力						
	柔軟的方略	プランニング方略	作業方略	人的リソース方略	認知的方略	努力調整方略	自己効力感	勤勉性	自制心	柔軟的方略	プランニング方略	作業方略	人的リソース方略	認知的方略	努力調整方略	自己効力感	勤勉性	自制心	
4.0	3.8	3.3	3.7	-	3.8	3.9	3.6	3.8	-	3.8	3.6	3.4	3.6	-	3.8	3.7	3.4	3.8	-
3.8	3.6	3.3	3.3	-	3.7	3.9	3.3	3.7	-	3.8	3.5	3.4	3.3	-	3.6	3.8	3.2	3.7	-
3.9	3.4	3.4	3.3	-	3.7	3.9	3.3	3.7	-	3.9	3.3	3.4	3.3	-	3.7	3.8	3.2	3.7	-
3.7	3.5	2.0	3.5	-	3.8	4.5	3.7	3.7	-	3.9	3.8	4.0	3.5	-	3.3	3.0	3.6	3.7	-
4.0	3.6	3.5	3.6	-	3.9	3.9	3.6	3.8	-	3.0	2.3	2.0	2.3	-	2.7	2.9	3.4	3.3	-
4.6	2.0	3.3	2.0	-	2.5	3.0	3.0	3.6	-	3.2	3.0	3.3	3.0	-	3.0	3.3	2.1	2.9	-
2.9	1.7	2.0	1.5	-	2.5	2.5	2.1	2.6	-	2.7	1.8	1.7	1.5	-	3.3	2.0	1.5	2.6	-
4.2	3.3	3.2	3.7	-	3.6	3.5	4.0	4.0	-	3.0	3.0	3.5	3.5	-	3.5	3.5	3.7	4.1	-

※実際の帳票は、波線部分で繋がって一つのシートになっています。

※スタートとなる小学校4年生は、「伸び」の情報がないため、実数値だけの分析となります。

Point

まずはその子の「伸び」に注目することから！

まずは一人一人の伸びに注目することからです。伸び幅や伸びる時期は一人一人違って当然です。平均や数値の高低、他人との比較でなく、まずは僅かでも伸びている部分に着目していきましょう。そして、その伸びを導いた諸要因（指導や取組の成果等）を実践感覚から推測します。今後さらに多くの子ども達を伸ばしていけるよう、成果につながる諸要因を推定し、それを指導者や組織の「強み」として大切にしていきます。その次に、「伸びの見られなかった」部分にも目を向け、同様にその諸要因や指導上の課題等を推測し、今後の指導・改善に繋げていきましょう。